

「柏崎の橋」 58 信越本線 鵜川橋梁（大久保・新橋）

鵜川橋梁は、鵜川にJR信越本線を渡すための鉄橋である。信越本線の前身、北越鉄道の柏崎・鉢崎間が開業したのは明治30年8月なので、橋ができたのはその少し前と考えられる。

鵜川橋梁の近くには鵜川が急に屈曲する場所があった。そこは「鐘が淵」と呼ばれ、西光寺から転げ落ちた鐘が沈んでいるという伝説が残る。橋ができる前の「鐘が淵」付近は、竹や雑草が生い茂る中に細道があり、そのすぐ下に、見るからに恐ろしげな青い淵がある、というものだったそうだが、鵜川橋梁や日本石油の工場ができた後は、すっかり様変わりしたという。

当時の柏崎では鉄橋は珍しい存在だった。橋に関する回想が『柏崎郷土史話』に記されている。

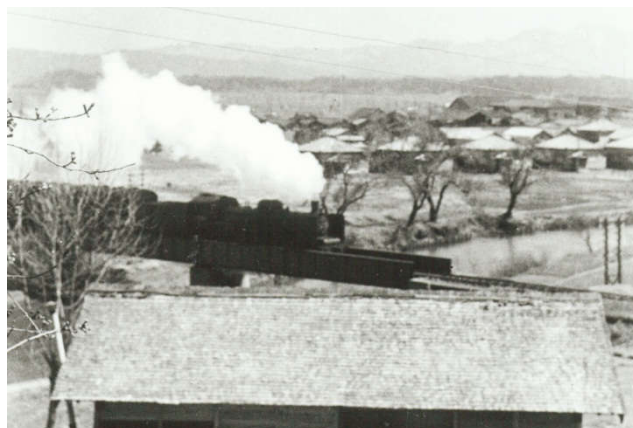
「木橋しかみていない我々の眼の前に、鵜川の鉄橋というものが架かった。これは前代未聞の魅力とあって、叱られることを承知の上で鉄橋渡りが始まった。それが夏になると、すっ裸のままの悪童が、鉄橋の線路に腰をおろして甲羅ぼしをやる。

（中略）号令一下、ザブンと鵜川に飛びこむ。」



大正時代の鵜川橋梁付近

『柏崎町乃附近之図』（柏崎文庫 11 巻所収）より
※鵜川部分を着色



西光寺から撮影した鵜川橋梁

真貝新一氏 昭和28年4月撮影写真の一部を拡大

また、鵜川橋梁は大久保方面と柏崎駅を最短距離で結んでいたため、鉄道橋にもかかわらず徒歩で通行する人が非常に多かった。もちろん通行は非常に危険であるため、鉄道当局は監視員を置いたり柵を作ったりして危険防止に努めた。しかしこの橋を通らなければ、新橋を渡って柳橋を抜けるという大変な遠回りをする必要があるので、通行者はなかなか減らなかった。それどころか通勤・通学の時間帯には行列ができるほどだった。

北越鉄道ができた頃、開業のお祝いとして『愉快ぶし』が作られた。そこでは「鵜川を渡れば柳橋」と大らかに唄われたが、鵜川橋梁の架かる場所は非常に地盤が悪く、後年の架替えや複線化はいずれも難工事となった。その甲斐あってか、鵜川の氾濫により他の橋に大きな被害がでた時も鵜川橋梁が流失したという記録はみられない。これも鉄道の安全性と信頼性の証しといえよう。

●参考にした本

『柏崎』（224 ナカ）中村葉月・西巻三四郎 著
『北越鉄道案内』（680 ホク）北越鉄道株式会社 編
『柏崎市伝説集』（388 Kキヨ）柏崎市教育委員会 編